慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	キネステーゼ意識と相互主観性
Sub Title	Kinesthetic consciousness and intersubjectivity
Author	谷, 徹(Tani, Toru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1985
Jtitle	哲學 No.80 (1985. 5) ,p.85- 106
JaLC DOI	
Abstract	This paper is an attempt to reinterpret the concept of "kinesthetic consciousness", a central notion of phenomenology, and through it to open a new perspective onto the problem of intersubjectivity. In §1, I refer to the "map-phenomenon" as a typical example of "objective space" representation, and show that the concept of spatial objectivity already presupposes subjective experience. In §2, Husserl's theory of "kinesthetic consciousness" is introduced as the structure of this experience. In §3, I attempt a reinterpretation of this theory by showing that the "here" of kinesthetic consciotisness functions as a transcendental condition of world orientation, in contrast to the empirically localized 'here', which is merely a point in objective space. Finally, in §4, we find, according to this interpretation, that the most original intersubjectivity consists in the non-localized "here", which operates essentially and necessarily in the plural.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000080-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

キネステーゼ意識と相互主観性

谷　徹*

Kinesthetic Consciousness and Intersubjectivity

Tōru Tani

This paper is an attempt to reinterpret the concept of "kinesthetic consciousness", a central notion of phenomenology, and through it to open a new perspective onto the problem of intersubjectivity.

In §1, I refer to the "map-phenomenon" as a typical example of "objective space" representation, and show that the concept of spatial objectivity already presupposes subjective experience. In §2, Husserl's theory of "kinesthetic consciousness" is introduced as the structure of this experience. In §3, I attempt a reinterpretation of this theory by showing that the "here" of kinesthetic consciousness functions as a transcendental condition of world orientation, in contrast to the empirically localized 'here', which is merely a point in objective space. Finally, in §4, we find, according to this interpretation, that the most original intersubjectivity consists in the non-localized "here", which operates essentially and necessarily in the plural.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程哲学専攻（倫理学分野）

序

本稿の目的は，現象学の根本概念のひとつである「キネステーゼ意識」[1] (kinästhetisches Bewußtsein) の構造を新たな視角から捉え直し，それによって，相互主観性問題への新たな展望を開くことにある．ここで扱うキネステーゼ意識とは，E・フッサールが，世界経験を現象学的に分析することによって見出した概念である．そして，この意識についての研究を振り返ってみると，これまでこの意識は，例えば空間構成，身体構成，動機づけ等の問題を考察する際の中核的概念として扱われてきた．その代表的研究としては，ドイツにおいては，U・クレスゲス．L・ラントグレーベ，E・シュトレーカー，B・ラング等のものを挙げることができる．また，フランスにおいては特にM・メルロ＝ポンティがこの概念を「身体図式」という独自の問題視角の下に移しつつ展開していった．[2] このような研究史を踏まえた上で，本稿はもう一度フッサールにまで戻る．そして，まず，従来のキネステーゼ意識の捉え方，つまり，「静態的」な意識としての捉え方を変更し，それを「発生的」に捉え直そうとする．次いで，この成果に基づいて相互主観性の問題への解釈を試みる．これが本稿の目的である．

そのための本稿の論述方法についてであるが，その前に，ヘッフェの次の言葉を思い出すことは適当であろう．「〔現象学研究者の〕場合には，フッサールの使用した余りに専門的な術語がほとんど遠ざけられておらず，従って自分の言おうとすることを自分たちの小グループ以外の外部の人たちにも十分理解してもらうことができないのである．[4]」この言葉は，様々な留保が必要であるが，それでも一面の真理を言い当てている．そこで本稿は，導入事例として「地図」という具体的，日常的な現象を取り上げることにしたい．というのも，キネステーゼ意識は何よりもまず客観的空間の構成[5]への問いの中で見出されてきた概念であり，そして，この客観的空

間表象の典型的事例が「地図」だからである．そして，この導入に続いて，フッサールのキネステーゼ意識論を，本稿にとって必要な範囲で概観し，更にそれを本稿の解釈へと展開する．最後に，この成果に基づいて，相互主観性問題の新たな解釈を試みる．以上のような論述方法を取ることにしたい．

従って，具体的論述は以下の順序で進められる．1．客観的空間表象の事例としての地図現象，2．フッサールのキネステーゼ意識論，3．キネステーゼ体系への新たな解釈，4．キネステーゼ意識と相互主観性．そして最後に以上の議論を簡単にまとめることにしたい．

1．客観的空間表象の事例としての地図現象

本節では「地図」現象を事例として，客観的空間表象の構造を示し，同時に，それを主観的経験が基づけていることを明らかにしたい．

極く身近な例で，最寄の駅から自宅までの地図を描く場合，我々は通常見慣れた近隣の風景に対して或る変形を加える．つまり，我々の視点を上空に移して，そこから当該の地理を見おろしているかの如く想像する．この時，我々は，自分が現にいる（主観的な）《ここ》をも客観的な空間の中の一地点つまり地図上の（他の点と権利上同等な）一点へと変貌させる．これは，フッサール的に言えば「上からの」(von oben her)[6]思考であり，メルロ＝ポンティ的に言えば「上空飛行的思考」(pensée de survol)[7]である．だが，この「上（空）からの」という表現はまだ不正確である．実際に上空から眺められた地理はそれ自体パースペクティヴ的[8]に，つまり一層具体的には鳥瞰図的に現われる．要するに，私が上空に位置する時には，私にとっての地理の「現出」は，その時の《ここ》から見られたパースペクティヴ的な風景なのである．ところが，地図はそのような《ここ》を，つまり私の《ここ》を排除している．地図は無限に多くの地点を，その真上上空の無限に多くの視点から見るという操作を通じて作成される．地図

は無限に多くの視点を含むが故に，私に固有な《ここ》を持たない．この意味で，地図の視点は理念的であり，「どこにもあり，どこにもない．」[9] 客観的空間としての地図においては，視点は omni-present であるが故に，私にとってはabsent である．こうして，地図的客観空間は，私の《ここ》を無数化することによって，それを無化する．地図に表わされる客観的空間とは，この意味で，現実の観察者の排除ないし奪主観化の上に成り立つ理念的なもの（理念化されたもの）なのである．

以上のような地図の奪主観的性格は，客観的空間表象の範例と看做しうるものである．しかし，この客観的空間という理念を我々がいかに常識的に「真理」として，空間の「真の在り方」として受け入れることに慣れているとしても，また，それを基準にしてしばしば「主観的なものの見方」を批判するとしても，先のように地図を作成しようとする場合には，少なからぬ知的作業が必要とされる．この経験的事実は，客観的空間が主観的な「生きられた空間」[10] の経験に基づけられて知的に構成された表象であることを示している．しかも，この場合の主観的経験が客観的空間を基づけるという関係は二重の意味を持つ．第一に，例えば通常，我々は予め地図を想定しながら，そしてそれと近隣の風景を対応させながら毎日道を通ったりはしない．このような場合がありうるのは初めての街を歩く時だけである．むしろ，我々は主観的に見た風景だけで十分に（少なくとも日常的には十分に）暮らしているし，そして，それをもとにして他人に地図を描いて見せるのである．この意味で，主観的経験は客観的空間の構成を可能にしている．ところが第二に，その当の地図を作成している場合，あるいは，作成された地図を見ている場合，この時にも，地図を地図として理解している当の私の主観的経験がそのつど成立している．つまり，この主観的経験は，いま現に地図を見ているこの私の《ここ》からの経験として成立している．このように，主観的経験と客観的地図空間との関係は，そのつど常に新たに前者が後者を可能にしている，という関係でもある．

では，この二重の意味で，客観的空間表象を可能にしている主観的経験とは，それ自体いかなる構造を持つのか．例えば，それは，再び客観的空間内の一点としての〈ここ〉から見られる経験であるのか．この問いに答えるには，主観的経験の分析が必要となる．そしてその時，見出されるのがキネステーゼ意識である．そこで次節では，このキネステーゼ意識についてのフッサールの分析を概観しておかねばならない．

2．フッサールのキネステーゼ意識論

本節の目的は，フッサールのキネステーゼ意識についての分析を本稿の問題設定に必要な範囲で概観することにある．

予め確認しておけば，現象学的分析にとって（客観的）空間は，例えばカントの場合のような単なる「感性の形式」ではない．客観的空間それ自体が主観的経験に基づけられており，その主観的経験を具体的に構造化しているものとして見出されるのがキネステーゼ意識なのである．このキネステーゼ意識は，主観的身体的な「能力（可能）性」(Vermöglichkeit) の体系として機能する．具体的には，「私は動く」という仕方で，更に一般化すれば「私はできる」という仕方で与えられる能力性の体系として機能する．従って，ここで扱われるべきなのは，この能力体系の機能構造である．この点について，本節では主に先述のクレスゲスの研究を手掛りとしつつ，特に視覚的キネステーゼ意識の機能構造を確認しておきたい[11]．従って，ここでは既に，他のキネステーゼ意識をエポケーする「視覚的還元」が遂行されている．

現象学的には，視覚経験は「視る働き」と「視られた対象」との相関関係から成り立っている．分析は，この「視られた対象」を手引きとして進められる．まず，この「視られた対象」の可視的部分 (das Sichtbare) は視覚的ファントム[12]と呼ばれる．この視覚的ファントムはそのつどの「側面」(Seite) を与える．例えばサイコロであれば，そのつど与えられるの

は，１の側面であり，３の側面であり……という具合である．しかも，この側面は，それぞれ常に同じ仕方で与えられるのではなく，そのつどの「アスペクト」において与えられる．このそのつどの諸々のアスペクトを通じて，私は対象の全側面を順次眺め通して行く(durchlaufen 閲歴する)ことができる．この際，そのつどのアスペクトにおいて視られたそのつどの側面は，次の瞬間には別のアスペクト，側面に置き代えられていくが，しかし，前者についての意識が，後者についての意識の出現によって完全に失われてしまうわけではない．ある瞬間の対象についての意識(原印象)は，次の瞬間の原印象の出現と共に，その新たな現在の中で「過去把持」という資格で保存されるのである．この意識構造によって，私は，絶えず新たな視覚経験へと移行ながら，それらを瞬間毎にバラバラに捉えるのでなく，それらを統一的に綜合していく（移行綜合）．以上のような閲歴による諸々のアスペクトの連続性の中で与えられた諸々の側面の連続体ないし統一体が「現出相」(Apparenz) と呼ばれる．視覚的ファントムは全体として，この現出相を通じて現出するのである．

さて，この現出相はそのつど一定の周囲状況（明るさ，暗さ，近さ，遠さ等々）の内にある．この多様な周囲状況の中でも特に最適な周囲状況の中で与えられる現出相が「最適現出相」と呼ばれる．そして，そのつどの(最適でない)現出相から最適現出相への移行可能性という理念を通じて，そのつどの現出相において，それと区別された「真のファントム」という理念が構成される．この真のファントムあるいは一般的には対象そのものはあくまでも理念であるが，それにも拘らず，我々の経験はこの対象そのものを志向するという意味で，目的論的に進行するのである．

さて，以上のような「視られた対象」は，そのつどアスペクト的に与えられるが故に，「アスペクト与件」(Aspektdaten) と呼ばれる．しかし，我々の主観的経験はアスペクト与件のみから成り立っているのではない．アスペクト与件は常に「立場与件」(Stellungsdaten) と対応して与えられ

るのである．具体的に言うと，例えば，ある対象が視野の右手前方に現われ，それが私の注意を惹き，私は，眼球，頭等の運動を通じて，それを視野の中央に(目の前に)移したとする．この時，アスペクト与件が持つ「右手前方」とか「目の前」という意味は，この《私》にとって，一層正確には，《私》がアスペクト与件に対して運動的に関係しうることによって，初めて構成されうる．換言すれば．対象の持つ〈そこ〉という意味は，そして更に一般的には（客観的には対象の総和であるはずの）世界そのものの持つ「地平」としての性格も，常に私の立場（について）の意識，そしてその立場に即しつつ私が対象に対して遂行する運動（について）の意識，これに対応してはじめて可能となる．このような，対象に対する私の立場（について）の意識与件，あるいは，対象に対する私の構えの取り方（について）の意識与件が，立場与件である．キネステーゼ意識とは，この二つの与件（アスペクト与件と立場与件）から，一層正確には，両者の間の運動的関係から成り立っている「意識体系」である．この意味で，キネステーゼ意識は，運動感覚意識とも訳されるが，決して運動する物体についての感覚ではなく，「運動としての感覚」[13]なのである．（上で「立場（について）の与件」等と表記したのは，この誤解を避けるためである．言うまでもなく，この括弧付の表記は必ずしもサルトル[14]のそれと同じではない．）しかも，このキネステーゼ体系は，先の論述が既に暗示しているように，単に顕在的なものだけではない．対象は常に既に「私は動く」の射程内において捉えられている．つまり，対象は単に「そこ」にあるというだけでなく，例えば，私がそれを手に取るためのその運動の潜在的，可能的な「行程」の中で意識されてもいるのである．要するに，キネステーゼ体系においては，対象は常に既に私の可能的な運動と関係づけられて現出するわけである．このようなキネステーゼ体系の潜在的，可能的な機能が「能力（可能）性」ないし「私はできる」として意識される．

以上の論述を一言でまとめるならば，キネステーゼ意識とは，アスペク

ト与件と立場与件との能力的体系の意識だということができるであろう．そこで，次節では，このキネステーゼ体系における立場与件の特殊な与えられ方に目を向けて，積極的な解釈を加えていきたい．

3．キネステーゼ体系への新たな解釈

本節では，特に立場与件の《ここ》の意味へと問いを向け，更にメルロ=ポンティの空間論をも考慮に入れつつ，新たな展望を開くことを試みる．

まず，これまでの議論を簡単に振り返ってみると，地図的客観空間は，主観的経験によって可能となる．そして，この主観的経験においては，〈そこ〉の対象はアスペクト的に現出するが，これはキネステーゼ体系の中で《ここ》が意識されていることによって，可能となる．そして，今，問われているのは，この《ここ》の立場与件の意識のされ方，与えられ方である．ここで，第一節の最後に立てた問いが再度提起されねばならない．即ち，この《ここ》を〈そこ〉と権利上対等な，客観的空間の中の一地点と考えることができるであろうか．答は否であろう．勿論，常識においては，私が〈ここ〉にいる，あるいは，私の身体が〈ここ〉にある，という時の〈ここ〉は客観的空間内の一点の意味で理解されている．また，言語的構造に注目すれば，「ここ」と「そこ」という指示詞は相関的・差異的にのみ機能し，その限りで権利上対等である．しかし，キネステーゼ体系の中での《ここ》は決して，これらのような，〈そこ〉と肩を並べる一地点でも一項目でもないはずである．というのも，《ここ》がそのような客観化され，局在化され，対等化された一地点であったとすれば，それはまさに客観的空間の中の一地点として，客観的空間を前提していることになってしまうからである．そもそも，キネステーゼ体系が客観的空間の可能根拠として見出されたとすれば，立場与件の《ここ》は決して客観的空間内の一点としての〈ここ〉ではない[15]．あるいはメルロ=ポンティの言葉を借りれば，「外面的座標との関係で決定された一つの位置ではない[16]．」勿

論，フッサールが立場与件の《ここ》を，客観的空間内の〈ここ〉から明確に区別していたかどうかは問題を含む．しかし，それにも拘らず，彼が「ここ」を「ゼロ現出」(Nullerscheinung)，「方位づけゼロ点」(Orientierungsnullpunkt)，更には「絶対的ここ」とさえ呼んで，それに比類なき性格を認めていた限りは，その含蓄の中に，本稿の意味での《ここ》を読み取ることも決して不可能ではない．以下では，この点を更に具体的に展開したい．

例えば，私は今，目の前にあるこのペンを見ているとする．その時に与えられる立場与件の《ここ》は決して（前述の表記法での）〈ここ〉と同義ではない．既えて《ここ》の局在化を試みれば，私の《ここ》は，身体[17]（但し対象としての身体）の〈ここ〉，眼球の〈ここ〉，網膜の〈ここ〉ということになろうが，我々は少なくとも通常，自分が網膜の〈ここ〉からペンを見ているとは思っても感じてもいないし，また，そもそも自分の網膜の客観的位置を正確に知っている人は（専門家でない限り）まずいないであろう．むしろ，《ここ》は，反省的に〈ここ〉へと局在化される以前には，つまり，キネステーゼ体系が世界構成的に作動しているその時には，いわば浮遊する「機能的価値」[18]的な《ここ》として与えられているのである．

しかし，ここで新たな問題が生じる．何故，反省は《ここ》を〈ここ〉へと変貌させるのか．この問いに答えることは同時に，キネステーゼ体系の中での《ここ》の特殊な与えられ方を更に明らかにすることにもなろう．さて，この答は，反省が自己知覚であることに存する．一般に知覚とは，対象を現に目の前に在るものとして構成する作用であり，その意味で「現在化」[19]と呼ばれる．そして，この「現に目の前に在るもの」として構成することによって，知覚は対象の時間的，空間的「位置」を規定する．つまり，対象を「局在化」する．従って，自己知覚としての反省においては，その対象となる《ここ》が上の働きによって，まさに局在化されてしまう

のである．従って，厳密に言えば，局在化されて現われた〈ここ〉は，通常の世界知覚における〈そこ〉のヴァリエーションにすぎない．先に網膜の例で示したような承認しがたい事態は，《ここ》を〈そこ〉と同じような仕方で再構成（即ち反省）しようとする時に生じるのである．そして，このことから明らかなように，《ここ》はいわば意識の面前に現われないような仕方で，むしろ隠れるという仕方でのみ与えられる．あるいは，意識の主題とはならないような仕方で，むしろ非主題的に与えられる[20]．主題化された〈ここ〉は《ここ》の「痕跡[21]」であり，そして，まさに，〈ここ〉が「痕跡」だと言いうる根拠として《ここ》は非主題的に与えられるのである．

さて，本稿のこれまでの論述は，以下のように整理して捉え直すことができる．第一に，立場与件そのものについて言えば，立場与件は，キネステーゼ体系の作動の中で〈そこ〉の意味を可能にする根拠として与えられている．この意味で立場与件の《ここ》は〈そこ〉の超越論的な可能性の条件である．しかし，この《ここ》は非主題的にしか与えられない．第二に，反省的観点においては，《ここ》は（無理に）局在化されて，〈ここ〉として現われる．あるいは，〈ここ〉へと存在者化[22] (ontifizieren) されると言ってもよかろう．しかし，この反省的局在化は，立場与件をアスペクト与件へと変様させようとすることに他ならない．そして，このアスペクト与件化された〈ここ〉を「現前」(présence) と読み換えるならば，ここにはまさに「現前の形而上学[23]」が成立する．ところが第三に，この第二の事態を（第一に示された）キネステーゼ体系の作動の内側に立って考察する時には，「反省によって現出してくる〈ここ〉は《ここ》ではない」ことが，既に当の（今は反省的に作動している）キネステーゼ体系自身によって『知』られていること，これが確認される．つまり，作動しているキネステーゼ意識は，〈ここ〉によって，それを可能にしている自らの《ここ》が隠されていることを『知』っているのである．しかし，この『知』は，

当然，アスペクト与件的意味での「対象についての知」ではない．つまり，典型的には，「自然科学的」ないし「自然主義的」[24]と呼ばれる従来の知の概念とは根本的に異なっている．本稿の立場においては，この新たな『知』の次元こそ重要である．以下では，更にこの点を敷衍したい．

自然主義的な知は「それ自体において実在的に完結した物体界としての自然」[25]についての知である．つまり，主観との相関関係を無視した，没主観的な対象についての知である．いわゆる「理念化」[26](Idealisierung) の問題を度外視して，純粋にこのような知の形式のみを考えるならば，このような知は，アスペクト与件のみについての知であり，〈そこ〉のみについての知である．つまり，この知は観察する主観の《ここ》を無視する，あるいはより正確には（地図の場合と同様に）《ここ》を「どこにもあり，どこにもない」ものとして想定する．端的に言えば，この知は，キネステーゼ体系の体系としての在り方を無視して，そしてその意味でキネステーゼ体系の外に立って，アスペクト与件を視ようとする．このような知に対して，キネステーゼ的な『知』は，この体系の機能遂行の中に立つ時にはじめて，それが与えられていることが理解されるような知である．

従って，以上のことから既に明らかなように，キネステーゼ的な『知』は，世界についての知(＝アスペクト与件的な知)であると同時に自己（について）の知（＝立場与件的な知）でもあり，要するに体系としての知なのである．従って，この体系から立場与件のみを切り離して捉えること，つまり，「心理学者として……心を……まさしく客観的な，従って当然，内世界的な……認識の仕方で……認識する」[27]こと，こういったことはできない．このような認識の仕方を取る時には，まさに認識を遂行している心理学者自身の《ここ》が「自己忘却」されることになる．むしろ，本稿でのキネステーゼ意識とは，この心理学者が見ている〈そこ〉と，彼自身の《ここ》との内的な体系である．この意味で，キネステーゼ的な『知』とは，〈そこ〉と《ここ》との「間」(Zwischen) の知，しかも，その「間」

の中に立ってはじめて真に理解される知だと言うことができる.

以上によって，キネステーゼ的な『知』の根本特徴が多少とも明らかになってきたように思われる．一言でいえば，それは，体系の内側での知，いわば内属知なのである．そして，筆者は，この内属知においてこそ「絶えざる“世界構成”という超越論的生における絶対的（究極的意味で超越論的）な主観性の必然的で具体的な存在様式[28]」が開示される，と考える．このように解釈することが可能だとすれば，更に，これに基づいて，従来の現象学の諸問題を新たに捉え直すこともできよう．次節では．この諸問題の内，特に相互主観性の問題を取り上げ，それを新たに解釈してみたい．

4. キネステーゼ意識と相互主観性

本節の目的は，前節までの考察の成果に基づいて，フッサールが相互主観性を問題にしたその目的と，その具体的内容との間の矛盾を回避する方向を見出すことにある．

まず，フッサールの相互主観性理論の目的については，一定の曖昧性は含まれるにしても，従来の諸研究[29]を通じて，その本来的な目的はかなり明確にされてきている．この目的を一言で言えば，「客観性の超越論的基礎づけ」と言うことができよう．つまり，世界及びその内部の諸対象は「客観的」という意味を持って現われてくるが，この意味は，それらがこの〈私〉にとってのみならず，だれにとっても妥当する，という意識に支えられている．このような視点の複数性という仕方で意識されるのが相互主観性であり，従って，相互主観性理論は，本来的には「客観的世界の超越論的理論を基づける[30]」という目的を持つのである．（とすれば，客観性を可能にする相互主観性は，本来，客観的世界の中でのひとつの実在としての「人間」とは区別された『超越論的相互主観性』でなければならない．）そして，以上のような客観性の基礎づけ，あるいは，客観性の可能根拠の究明という目的に関しては，相互主観性理論と，前節までのキネステーゼ

意識論とは同一軌道上にあると言うことができる.

ところが，次に，相互主観性理論の具体的内容に関しては，フッサールは，それを「自己移入」(Einfühlung) に求めた．つまり，まずもって，フッサールは「他の主観性に……関係する志向性の全ての構成能作を度外視する.[30]」それによって，「私の固有領分」が得られる．この手続きがいわゆる「第一次的還元」(primordi(n)ale Reduktion) である．そして，この固有領分において「私の物体的身体は……中心的な“ここ”という所与様式を持つ.〔これに対して〕……“他者”の物体〔=他者として構成さるべき物体〕は“そこ”という様態を持つ.[31]」さて，この時フッサールは，私の身体と，(他者の) 物体との類似性によって，両者は「対化」され，後者が身体という意味を受け取る，と言う．但し，厳密に読むならば，フッサールは“ここ”にある私の身体と，“そこ”にある (他者の) 物体とが直接に「対化」されるとは述べていない．「〔“そこ”という様態における他者の物体の〕現出様式は，私の身体がそのつど現実に持っている (“ここ”という様態での) 現出様式と，直接的連合において対化されはしない.[32]」むしろ，他者の物体の「現出様式は，私がそこにいたならば〔呈するであろうところの〕私の物体的外観を想起させる.[32]」とすれば，私は，他者構成以前に，“そこ”における私の外観を見知っていて，それと他者の物体とが類似していた[33]からこそ，他者の物体は私の外観を想起させるということになろう．ところが，その外観は「私がそこにいたならば」という接続法二式での外観にすぎない．とすれば，フッサールは，上の論述の“ここ”を，一定の留保はつくが少なくとも第一義的には (当然，《ここ》と混同しつつ) 客観的空間内の〈ここ〉と考え，そして，〈ここ〉に局在化された私から，〈そこ〉の他者を構成しようとした，と結論できよう．以上が，『デカルト的省察』までのフッサールの相互主観性理論の基本的な内容である.

しかし，まさにこの時，矛盾が明らかとなる．つまり上の“ここ”が，

客観的空間内での〈ここ〉であるとすれば，客観性の超越論的基礎づけという目的を持った相互主観性理論が，内容的には，逆に客観的空間を前提しているという矛盾である．この矛盾を回避するには，恐らく方向は基本的には二つに分かれる．即ち，そもそも超越論的基礎づけという目的を放棄して，矛盾のない経験的な「人間」的相互主観性（その中には心理学的な他者知覚の問題も含まれよう）のみを問題とするか，逆に，この目的に即して，相互主観性理論を内容的に全面的に改変するか，のどちらかである．例えば，A・シュッツやK・レーヴィットなどは前者の方向を取ったが，フッサールはこれ以後は後者の方向を進んで行ったように思われる．そして，本稿もこの後者の方向で，相互主観性理論の新たな解釈を試みてみたい．

まず，もう一度出発点としての自然的経験に戻ってみると，通常，我々は，チェスの盤上に駒があるかの如くに，相互主観性を考えている．そして，その一地点である〈ここ〉に私は局在化され，他者は各〈そこ〉に局在化されているかのように考えている．それ故に，〈私〉にとっての世界現出は，〈ここ〉から見られた局地的な現出にすぎない，とされる．そして，実際，フッサールもこのような考え方を（混同したまま）「素朴に」受け入れてしまい，そのために，私の「局地性」を越えた客観性を説明する[34]方途を，自己移入，つまり，諸々の〈そこ〉に〈ここ〉という意味を分与する作用としての自己移入に，求めたように思われる．ところが，繰り返し述べたように，このような説明の前提となっている客観的空間表象それ自体が理念的な知的構成物であるとすれば，そして，この表象が（先の『デカルト的省察』の失敗が示すように）超越論的領野の中に「超越論的素朴性[35]」として入り込んでいるとすれば，まさにそのような表象を可能にしている『主観的経験』を露呈させる手続きが必要となる．そして，このような手続きとして先の「第一次的還元」を解釈し直すことも決して不可能ではない．（少なくとも結果的には，この手続きは，最初から客観的空

間及びその中での「人間」的相互主観性を前提していては捉えることのできない意識次元を開示することになった，と言える.[36]）つまり，この場合には，「第一次的還元」はもはや，〈ここ〉の〈私の〉と修飾された主観的経験へと帰る手続き，つまり「独我論的還元」ではない.[37] むしろ，（この素朴な考え方を可能にしている主観的経験，従って，もはや〈ここ〉の〈私の〉経験ではない『主観的経験』としての）キネステーゼ体系の内側へと戻る手続き，そして，その構成遂行の只中でその構成遂行の様態を捉えようとする手続き，として理解される.

そして，予め述べておけば，ここでは，上の解釈によって開示された意識経験に基づいて，フッサールの言葉を理解し直す必要が生じる．というのも一般に言葉は，素朴に捉えられた事態を指示するが，ここでは，そのような事態の『可能根拠』がこの同じ言葉によって指示されているからである.[38] このことは，現象学の言葉全てについて妥当するが，特にここでは問題事象が微妙なだけに，注意が必要である．このことを確認した時，以下のように全く新たな視角から相互主観性問題を捉え直すことができるように思われる.

まず，既に述べたように，作動の只中でのキネステーゼ体系は，まずもって主題的には，アスペクト与件つまり〈そこ〉についての意識として機能する．他方この時，立場与件つまり《ここ》（について）の意識は非主題的であり，局在化されてはいない．とすれば，この時には，私が〈ここ〉から〈そこ〉を見ているという，いわば隔てられた「間接的な」意識は成立せず，むしろ，さしあたって私は直接〈そこ〉において《ここ》を生きることになろう．これは，例えばM・ハイデガーが「現存在が己れの空間性に応じてさしあたって存在しているのは決して“ここ”ではなく，“そこ”である……」[39]と言う時に捉えていた事態である．言うまでもなく，ここで問題なのは，客観的空間内での位置ないし距離ではなく，キネステーゼ意識における位置ないし距離である．一例をひけば，たとえ〈そこ〉に

あるコップの口が私の網膜には楕円形に映っているとしても，キネステーゼ意識にとっては（幼児が描く絵のように）その口は円形である．これは決して「錯覚」ではなく，この時には，キネステーゼ的な《ここ》がその口の〈そこ〉へといわば「転移」し「付着」しているのである[40]．この事態においては，対象現出は決して，〈ここ〉から見られたという意味での単一視点的，単一パースペクティヴ的な現出として理解されてはいない．むしろ，「方位づけゼロ点」としての《ここ》が局在化されておらず，諸々の〈そこ〉において生きられている限り，対象現出は，匿名的な多視点的，多パースペクティヴ的な現出として経験されているのである．従って，この時には，（通常の語義では「自我」が「〈ここ〉から見ている主観」を意味するとすれば，）一種の『自我分裂』[41] (Ich-Spaltung) とも言うべき事態が経験されている．

しかし他方，この事態は既述の地図現象における omnipresent-absent の意味での無視点性と同じではない．地図は全ての視点を取り込むことによって，パースペクティヴ性を全面的に否定する．この非パースペクティヴ性は，言ってみれば全くだれのものでもない無差別な[42]「意識一般」の面前での現出に等しい．ところが，先の『自我分裂』は，キネステーゼ体系内での事態である限り，同時に《ここ》の持ついわば流動的な統合力を有してもいる．とすれば，《ここ》の持つ現出は，非パースペクティヴ的でも単一パースペクティヴ的でもなく，むしろ，緩やかな「一律調和性」[43]を持った「多パースペクティヴ的現出」なのであり，従って，キネステーゼ的《私》は，〈そこ〉へと分裂しつつ（＝複数視点性を了解しつつ）同時にそれを内的に統一しているのである．

以上のような意味で，キネステーゼ意識は，もはや〈ここ〉の〈自我〉の意識ではないが，そうかと言って決して無差別な「意識一般」には解消されない限りで，《原自我》[44]の意識と呼ばれうるだろう．この《原自我》の意識は，能動的に構成された客観的空間表象を前提していては決して捉え

られず，むしろ，その構成を可能にしている最も根源的なキネステーゼ体系の作動の只中でのみ与えられる．この意味で《原自我》は《原受動的》にのみ意識される．この《原受動的》な《原自我》こそが，先述のような（客観主義的には矛盾とも映るであろう）緩やかな統一性における自我分裂という構造を有するのである．従って，最初に〈ここ〉の〈自我〉が構成され，次いで自己移入によって「志向的越境」がなされるとか，また，先のような無差別な意識が最初に成立しているとか，というのではない．このような議論がそもそも，能動的に構成された客観的空間表象を前提していることは何度も述べたとおりである．むしろ，その前提となる原受動的な意識経験において，先のような（いわば隠された）自我分裂が意識されているのであり，そして，まさにこの意味ではじめて《原自我》の「複数的」存在様式つまり《相互主観性》ということが言われうるのである．

こうして，原受動的次元で既に対象現出は相互主観的なものとして経験されているのであるが，しかし，このことを通常の意味での「他者知覚」と混同してはならないであろう．というのも，「他者知覚」は通常，〈ここ〉の〈私〉が〈そこ〉の〈他者〉を知覚する，という枠組の中で語られるが，上述の原受動的な相互主観的経験は，まさにこのような枠組そのもの，つまり，客観的空間表象そのものの可能根拠となっているからである．換言すれば，〈私〉が〈ここ〉に局在化された単一パースペクティヴ的な対象現出を持つという通常の考え方（この考え方はそれ自体，客観的空間表象の枠組の中にあるが故に必然的に，〈そこ〉の〈他者〉は別の単一パースペクティヴ的現出を持つという考え方と対になって登場するが），この考え方こそが，実は既に原受動的次元での相互主観的多パースペクティヴ的な現出経験を前提してはじめて可能となるのである．(45)

さて，以上のように考察してくる時，フッサールの超越論的現象学がめざすべき相互主観性理論は，決して〈自我〉から〈他我〉を構成する理論でもなく，かと言って，常識的に理解されている事実，つまり〈自我〉が

〈他我〉と共存しているという事実をことさら哲学的に「再確認」する理論でもないことになる．むしろ，相互主観性理論は，〈自我〉ではなく《原自我》としての超越論的主観性の「必然的で具体的な存在様式」についての理論である．つまり，決して客観的な自然的経験（この中には〈自我〉と〈他我〉についての経験も含まれる）の中での理論ではなく，むしろ，そのような自然的経験一般の（隠された）『可能根拠』としての超越論的主観性の存在様式，それも論弁的にではなく具体的に生きられている存在様式についての理論なのである．

結　　語

本稿の目的は，キネステーゼ意識の構造を新たな視角から捉え直し，それによって，相互主観性問題への新たな展望を開くことであった．まず第一節では，地図現象を通じて客観的空間表象が主観的経験を前提していることが示された．第二節では，その主観的経験の構造としてのキネステーゼ意識が示された．第三節では，このキネステーゼ意識が発生的に解釈され，〈そこ〉と《ここ》との「間」の知として再呈示された．第四節では，この解釈に基づいて，相互主観性が《原自我》の存在様式であることが示された．

以上によって，《原自我》の存在様式の一端が多少でも明らかになったとすれば，これを超越論的主観性の全体的存在様式の中で統合的に捉え直すことが，次の課題であろう．

注

フッサールからの引用は，Husserliana の巻数をローマ数字で記した後に頁数を記す．

（1）本稿では，フッサール自身が「心理学的意味を排して」kinästhetisch という言葉を用いたのに従い，これを「キネステーゼ的」等と記す．Vgl. Hua XVI, S. 161.

(2) U. Claesges; "Edmund Husserls Theorie der Raumkonstitution" (Nijhoff, 1964); 'Zeit und kinästhetisches Bewußtsein' in "Phänomenologische Forschungen" Bd. 14 (Alber, 1983) L. Landgrebe; 'Reflexionen zu Husserls Konstitutionslehre' in "Tijdschrift voor Filosofie" Bd. 36. (1974) E. Ströker; "Philosophische Untersuchungen zum Raum" (Klostermann, 1965) B. Rang; "Kausalität und Motivation" (Nijhoff, 1973) M. Merleau-Ponty; "La Phénoménologie de la Perception" (Gallimard, 1945)

(3) Claesges; 1964, S. 59, 142. 1983, S. 144.

(4) O. ヘッフェ「現代哲学の問題構成」12頁,『哲学の変貌』(岩波書店1984) 所収.

(5) 本稿では空間構成論そのものは扱わない. この問題については前掲の当該書及び Hua XVI 参照.

(6) Vgl. z.B. Hua XVII, S. 169, 284.

(7) Merleau-Ponty; "L'Oeil et l'Esprit" (Gallimard, 1964) S. 12.

(8) 但し, このパースペクティヴ性は後に一定の変更を受ける.

(9) この概念は, 理念的対象の在り方を表わす. Vgl. Husserl; "Erfahrung und Urteil" (Classen, 1954) S. 311 K. Held; "Lebendige Gegenwart" (Nijhoff, 1966) S. 52 f. なお, Merleau-Ponty; "Signes" (Gallimard, 1960) に同題の論文が所収されている.

(10) この概念は,「まだ意識対象とならずに, あらゆる身体的及び精神的な能動性の遂行の中で前反省的に」与えられた空間性を表わす (Ströker; ibid. S. 18). Vgl. I. Kern; "Husserl und Kant" (Nijhoff, 1964), S. 148.

(11) この問題はフッサール自身の著作, 特に Hua XVI で扱われているが, 本稿では, (Hua XVI の編者でもある) クレスゲスの研究 (1964) に従う. というのも, この研究書は, フッサールの未刊の草稿をも含めた体系的, 包括的なものだからである.

(12) ファントムは, 意識超越的な「事物」を現象学的に還元することによって得られる. (Hua XVI のクレスゲスの序文 XIX 参照.) また, ファントムと後述の「現出相」との区別は,「現出者」(Erscheinendes) と「現出」(Ershceinung) との区別,「志向的対象」(intentionaler Geqenstand) と「対象的意味」(gegenständlicher Sinn) との区別等との異同関係を含めて考察さるべきであろう.

(13) Rang; ibid. S. 161.

(14) Z.B. »le conscience non-thétique (de) soi« in "L'être et le néant" (Gallimard, 1943)

(15) 《ここ》は，経験的な〈ここ〉を可能にするという意味で超越論的な《ここ》である．本稿ではこの表記法を用いる．

(16) Merleau-Ponty; ibid. S. 117.

(17) 身体は，対象化によって経験的〈ここ〉に局在化されると同時に，その局在化を可能にする超越論的主観的《ここ》としても機能する．この身体の両義的構成については，拙論「フッサールの人格概念」『倫理学年報』第33集(1984) を参照頂きたい．

(18) Merleau-Ponty; ibid. S. 174.

(19) 「現在化」(Gegenwärtigung) については，Held の前掲書参照．

(20) 従って，筆者の言う「非主題性」は，例えばゲシュタルト的な「図と地」の地の意味での未主題性ではない．後者は見方の変更によって主題化可能であるが，前者はそのような主題化作用自身によって隠され，同時に，その隠されていることが意識されるような非主題性である．拙論「非主題的意識」『理想』No. 612 (1984) を参照頂きたい．

(21) J. Derrida; "La voix et le phénomène" (PUF, 1967) §5.

(22) この概念は，超越論的自我が，自己を時間的存在者として構成することを表わす．Vgl. Held; ibid. S. 89 f.

(23) Derrida; ibid.

(24) この概念については特に Hua IV, VI 参照．

(25) Hua VI, S. 61.

(26) この概念については特に Hua XVII, "Erfahrung und Urteil" 参照．

(27) Hua VI, S. 210.

(28) Hua VI, S. 275.

(29) Vgl. M. Theunissen; "Der Andere", (de Gruyter, 1965) K. Held; 'Das Problem der intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie' in "Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung" (Nijhoff, 1972) usw.

(30) Hua I, S. 124.

(31) Hua I, S. 145 f.

(32) Hua I, S. 147.

(33) 「"そこ" にある他の身体は…… "そこ" における私の身体に似ているという仕方で身体という意味をもつ.」(Hua XIII, S. 330)

(34) 「説明」は現象学的「解明」とは区別される．Vgl. z. B. Hua II, S. 6.

(35) Hua VIII, S. 170.

(36) マイストも，シュッツのように「我々」を前提すると「(客観的) 世界と相互主観性との構成連関を解明するという課題は……解かれない」と言う．Vgl. K. R. Meist; 'Monadologische Intersubjektivität'

(37) フッサール自身，original と originär を区別する場合がある．前者が〈ここ〉の〈私〉に固有な経験を表わし，後者がむしろ真に超越論的に原初的な経験を表わすとすれば，フッサール自身が本稿の解釈を（混用しつつも）暗示していたことになる．Vgl. Hua XIV, S. 234.

(38) この問題については，拙論「現象学的反省と超越論的言語」本誌第75集（1982）を参照頂きたい．

(39) "Sein und Zeit" (Niemeyer, 14. Aufl. 1977) S. 107.

(40) これは，「楕円が真円を指示する」といった知的な記号的関係ではない．むしろ，端的に知覚されたものが持つ「意味」そのものの構成契機が分析されているのである．そして，後述のように，まさにこの構成契機として「内的な超越論的相互主観性」が見出されるのである．

(41) ゾンマーは，Hua XI でのフッサールの議論を解釈しつつ，この「自我分裂構造」を剔出している．M. Sommer; 'Fremderfahrung und Zeitbewußtsein' (1984)

(42) M. シェーラーは，「"さしあたり" 我-汝に関しては無差別なある体験流が流れている」と言う ("Wesen und Formen der Sympathie", S. 240). しかし，この主張を厳密に理解すると，「シェーラーの見解は，意識の個体化が成立しない一種の汎心理主義に至る」(Merleau-Ponty; "La conscience et l'acquisition du langage", S. 48), あるいは「自己意識の問題に対するシェーラーの態度は，極めて辻褄が合わない」(A. Schütz; "Collected Papers I", S. 171) という批判を生む．

(43) 通常「一律調和性」(Einstimmigkeit) は「移行綜合」における継起的現出の調和を表わすことが多いが，ここでは，多パースペクティヴの同時的調和を表わしている．

(44) Vgl. z. B. Hua XV Text Nr. 33. この《原…》は，自我が受動的に触発されるよりも，もう一次元受動的な様態を表わす．Vgl. z. B. Held; (1966) S. 27 f.

(45) 従って，この次元では，「他者問題一般」をもはや〈局在化された私〉から考えてはなるまい．例えば，鏡の中の自分の眼をじっと注視する時，視てい

るのが〈ここ〉の眼であるより，鏡の中の〈そこ〉の眼であるように感じるとすれば，それは《ここ》が局在化されていないからであろう．この時には，鏡像それ自体が既に相互主観的であり，その中には〈ここ〉から視た現出と〈そこ〉から視た現出とが共存しており，その意味で「匿名の可視性」(メルロ=ポンティ)が成立しているのである．このような相互主観的経験を，客観的空間内の〈ここ＝私〉へと局在化し，同時に，それへと局在化し切れない部分を〈そこ＝他者〉へと配分することによって「モナド」が構成されるとすれば，このモナド化は，原受動的相互主観性としての《原自我》のまさに「自己疎外」(Hua XV, S. 636) なのである．そして当然この時，〈ここ〉へと閉じ込められた〈私〉にとっては，〈そこ＝他者〉はまさに〈異他的なもの〉として現われる．しかし逆に，このモナド的〈他者〉は，原受動的相互主観性のいわば具現者でもある限り，《原自我》の開かれた複数的存在様式を常に何らかの仕方で開示してもいる．その意味で，〈他者〉は常に〈私〉よりも多く《原自我》を開示している．従って，モナド論的次元において，他者問題を一般的に社会性，歴史性の問題として分析していく時にも，「常に既に共作動している」という様態で原受動的な内的相互主観性が開示されてくるのである．

参照『他者の現象学』(北斗出版，1982) 所収の諸論文，Merleau-Ponty; "Le visible et l'invisible" (Gallimard, 1964) S. 188.